野添（のぞえ）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「豊橋」）

所　在　地　豊橋市石巻本町地内
（北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒）

調査理由　道路改良工事(交付金（主）東三河環状線

調査期間　令和5年8月～10月

調査面積　960㎡

担　当　者　樋上 昇・田中 良

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課による道路改良工事（交付金）（主）東三河環状線に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成25年度に2,000㎡の調査が行われ、令和4年度は、高位の段丘上を4,055㎡の調査を実施した。今年度の調査は、令和4年度調査区22C区の西側にあたる、960㎡を調査した。

立地と環境　遺跡は豊川左岸の河岸段丘縁辺部に立地し、東側には神田川沿いの低地がある。調査地点は河岸段丘上に位置し、平成25年度調査地点は低地および段丘崖にあたる。遺跡の周辺には、神田川沿いの低地に弥生時代中期から後期、中世を主体とする東下地遺跡がある。

調査の概要　今回の調査では、隣接する22C区と同様な区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が検出された。また、掘立柱建物跡は12棟確認され、区画溝の南西からは素掘りの井戸が検出された。出土遺物には、大量の内耳鍋片や土師皿などの土師器、天目茶碗などの陶器片、磁器片、鉄滓などがあり、時期は15世紀末から16世紀が主体となる。

２３区　23区からは、22C区の北西から西へ伸びる区画溝の続きとなる20SD・30SDと区画された屋敷地内で掘立柱建物跡が12棟検出された。また、本調査区は遺構の残りが良好で、表土から遺構検出面までは約30cmである。中には、遺物包含層から掘り込まれる遺構もあり、堆積状況も良好であった。23区では、22C区の区画よりも若干古い15世紀末の遺物が出土しており、17世紀前半の遺物がほとんど出土していないのが特徴的である。また、一番古い区画溝の底面からは、15世紀末の土師器皿が出土している。さらに、柱穴や土坑からは天目茶碗や稜皿、青花端反皿など22C区よりも多彩な遺物が出土している。

２０ＳＤ　今回の調査区で検出された区画溝は、屋敷地の北西を区画する溝で、22C区の区画溝と同様、幾度も掘り返されており、20SDはその中でも一番新しい区画溝である。この区画溝は、西側は深さ約50cmになるが、南側へ屈曲する部分は約10cmと急激に浅くなり、また東側で約30cmの深さとなる。南側へ屈曲する部分が屋敷の出入り口に相当するか。しかし、特に構造物のようなものは確認できていない。出土遺物は、内耳鍋のほか土師器皿が多く出土している。また、硯の破片が1点出土している。

区画溝の中でも一番古い区画溝460SDの底面からはロクロ成形の土師器皿が出土しており、屋敷地の開始時期は15世紀末と考えられる。

ＳＢ０１　根石を伴う掘立柱建物跡(SB01)は23区北西部で検出された。SB01を構成する柱穴のうち、50・55・56・76・77・78・92SPの底面に拳大～人頭大の亜角礫が検出された。時期は、周囲の遺物から16世紀頃と考えられる。

ＳＢ０２　礎石を伴う掘立柱建物跡(SB02)は、23区北側から検出された。SB02を構成する柱穴のうち、47・49・91・227SPの埋土中から人頭大の亜角礫が検出された。SB01と違い、柱穴

根石をもつ掘立柱建物跡01(SB01)
掘立柱建物跡(推定)
22C区
23区
0276SD
0123SD
SB13
SB09
SB03
SB07
SB06
SB02
SB08
SB12
SB01
SB05
SB10
SB04
SB11
21SE
460SD
20SD
30SD
0
S=1/300
10m
区画溝(16世紀~16世紀末)
区画溝(15世紀末~16世紀)

遺構全体図 (S=1/300)

の底面ではなく埋土中から板状の亜角礫が検出されたため、礎石と考えている。

ま　と　め　　今年度の調査では、22C区よりも多くの掘立柱建物跡を含む柱穴群と新たに井戸21SEが検出された。また、柱穴や区画溝から出土した遺物は、22C区よりも古い15世紀末から16世紀のものが主体である。さらに、多彩な陶磁器や硯などからも今回の調査区が屋敷の中心により近いことが伺える。このことから、屋敷地は西側に中心があり、何度も建て替えながら、徐々に東側へと広がっていったことが分かった。

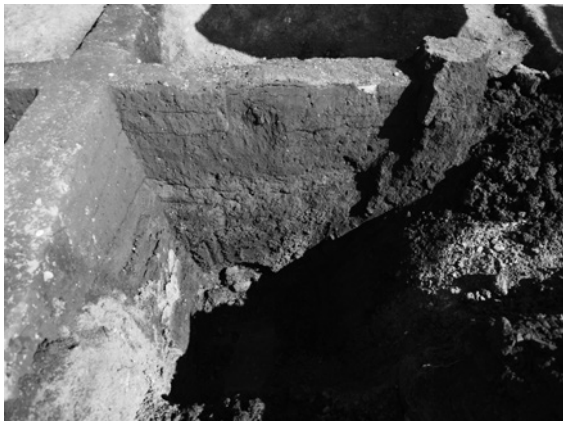
(田中　良)

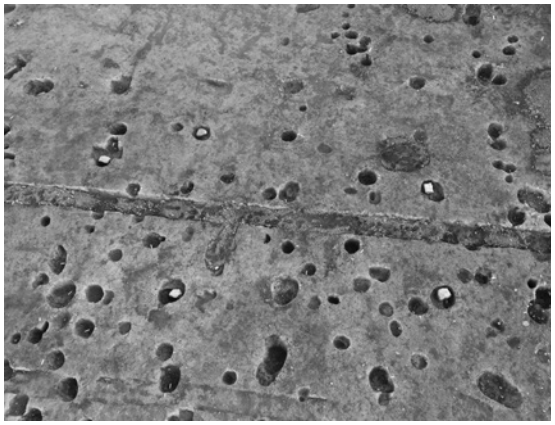
調査区全景 (南から)

区画溝 20・30SD 土層断面 (東から)

区画溝 20SD　硯出土状況 (北から)

区画溝 20SD　遺物出土状況 (西から)


井戸 21SE 土層断面 (南から)


礎石を伴う掘立柱建物跡 SB02(南から)